
天使

みるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使

【NZマーク】

NZ3988NZ

【作者名】

みるく

【あらすじ】

私は天使に出会いました

プロローグ

サクラがまつ中、私たちは出合つたんだ。

ピンクの花びらが私のまわりを舞う。

この花びらたちは土に戻つて、私たちを生かすための栄養をつくる。

そしてまた、私たちにサクラを見せてくれるんだ。

この綺麗なサクラは夢だったとは思えない。

だけど・・あなたは夢なのかな・・・?

現実を見る私はサクラの花びらを見ないといけない。

現実じゃないあなたを見てはいけない・・。

私は花びらなんてどうでもよかつた・・・。

ただ、あなたを見れたらよかつたんだ・・・。

第1章 サクラ

「ゆ、有紀さ・・スカート短くない？」

私は有紀のスカートをちらりと見た。ひざ上7センチほどの中学生。おつている様子はないのでおそらく縫つてあるかきつたのである。

「えー！！日和のスカートが長すぎなんだよ。」

有紀は自分のスカートをぱんとたたいた。私のスカートはひざ下5センチほど。入学式なので普通のはずだ。今年から私たちは中学生になる、初めての制服で少しテンションが高いのかもしれない。だけど、中学校では先輩が先生より怖いと聞いた。なるべく目立たないようにしなければならない。

「彼氏できるかな？？」

有紀は鏡で自分の髪の毛をチェックしている。有紀は昔から大人びていた、小2の頃からもうすでに鏡を持ち歩いてたほどだし。私はとくに鏡なんて持つていない。かばんの中には筆記用具が入っているだけだ。軽いかばん、だけど1週間もすれば重くなるだろう。これからこのかばんの中にはたくさんの教科書が入ってくると思つとゾッとした。私たちは中学校に入った。

「クラスは一緒かな」？？

有紀は張り出されていたクラス表を見ている。そのとき、冷たい風がふいた。女子はスカートを抑えて必死に風に対抗をした。男子はどうとはしゃぎまわっている。

「あー！！違うクラスだし！！私は3組で日和は1組・・・。」

「残念だね・・・。」

私たちはそれぞれの教室に向かった。1年の教室は4階にあるので階段がきつい。踊り場にある掲示板には美術部の絵が張り出されていた。数人の少女達が楽しそうに見ていく。

「キャ！！」

私は階段でつまづいてこけてしまった。足がひりひりする。

「大丈夫？」

上から声がした。私は上を向くと少年が立っていた。黒髪でかつこいい少年だ。

「だ、大丈夫！！ありがとう。」

私は急いで立った。こんな恥ずかしいところを見られた！！

「あ・・えつと・・・・。」

私は頬を赤くした。恥ずかしい！！もしかしたらこの人はこの後、友達とかにこのことを言つかもしれない・・。私の脳内に少年が悪い顔をしていろんな人に言つている映像が映し出された。怖い！

「足でも痛いの？」

少年は優しい声で聞いてきた。

「だ、大丈夫！！！！！」

「そつか。」

少年はそのまま上へと上がつていった。私は手すりに全体重をかけてため息をついた。優しそうな人でよかつた。の人ならいわなさそう！！私はほつとした。とりあえず自分の教室へと急ぐ。教室に入るといっぱいの人が席に座つていた、先ほどの少年はいない。いろんな子がいる。不良な子やまじめそうな子、見た目だけでは判断できない子など。

「12番はと・・・・。」

私は自分の席を探し始めたがすぐに見つかった。前から2番目の席だ。

「ほんにちわ！…どこの小学校から来たの？？？？？」

前に座つていた女の子が私に話しかけてきた。

「御簾紀小学校からです。」

「おー！…私は大磯小だよ！…よろしく・・つて、名前を言わないとね、金子リクです。」

リクは1人でべらべらと話を進めた。私は啞然としてしまった。

「私の名前は釜月日和です。よろしくね。」

「よろしく…。」

「この子がはじめての中学校での友達だった。

「あ、あのさ……」

私はリクにさつきの少年の話をした。知っていたら嬉しいんだけどね。

「あーーー！ それは東原燐だよ。」

「東原……？」

よかつた、知つてるよ。

「私は違う小学校だつたけどすつごいかつこいって噂になつた。クラスの女の子全員から告白されたつて言ひ噂を聞いたことがあるけど、けつこう性格悪いらしによ。」

「え！？」

驚きだつた、かつこいいのは認めるけど性格悪いの？？じゃあ・・

さつきの言いふらされてたりしないよね？？私は不安になつた。

「東原がどうしたの？」

「な、なんでもない。」

なんでもないのに聞いてきた私をリクは不思議そうに見た。まさか性格が悪いとは。

「・・・何組か知つてる？？」

「なんかあつたの？」

「・・・べ、別に・・。」

「ふーん、確か3組。」

「へー。」

後で3組に行つてみよう、もう一回あつてみたいし。

「あの人だよ。」

リクは窓際に座っている少年を指差した。確かに東原だ、外を眺めている。窓の外には大きな桜の木の先っぽが見えている、先っぽだけ綺麗だ。その周りでは女の子たちが話しかけようと必死にチャンスをうかがっていた。

「どうするの？？話しかけるの？」

リクは私に聞いてきた。私は今、話しかけるのは失礼な気がしたが今すぐ話しかけたくなってきた。

「う、うん！！」

「機嫌損ねないようにな。」

「りょーかい！！」

私はゆっくりと東原に近づいていった、何を話そうかその間に考えながら・・・。話の内容はこれしかない！！私はそう思った。

「と、東原？？」

私は恐る恐る名前を呼んだ。機嫌を損ねないように・・・。

「ん？」

東原は返事をしたがこっちを向きそうにない。おそらく私が誰か分かっていないと思う。私は数秒黙った、何か返事があると思って、だけどまったく返事をしないのでもう一回話しかけることにした。うう・・女子からの視線がいたい。

「桜・・好きなの？？」

「・・・好き・・・」

東原はか細い声で答えた。そつか、桜が好きなのか。

「私も桜が好きだよ！！綺麗だよね。」

「・・・うん・・・・」

あれ？？何故かテンションが低いのは気のせいですかね？私はこれ

以上はなしかけるのは無理だと判断してリクのところに戻るつと
たとき

「……？」

東原の目から1粒の涙が落ちた。綺麗で透明な涙……。私は何
か分からなくなつた。東原はすぐに涙をふいてこっちを向いた。う
わー、やっぱりかつこいや。まつげ長いし。

「……どうこいつつもり？」

「はい？？」

東原は機嫌が悪そうに私を見た、冷たい目だ。

「あ……その、さつき私がこけたときに……その……」

「あ……俺なんかへんなこと言つた??」

「いや、全然!!」

相変わらず笑つてはくれなかつたけど機嫌は直つてきた。やつぱり
優しい目をしている。

「ありがとう……」

私は照れくさかつたがそう言つて逃げた。東原がどう思つたかは分
からないけど、私は何故か問う腹のことが愛おしく思えた。
恋・・なのかな??

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988z/>

天使

2011年12月16日17時54分発行